

文学博士川崎信定君の『一切智思想の研究』に対する

授賞審査要旨

「一切智」とはサンスクリット語の sarvajña（一切を知る者）の漢訳語であり、英語でいえば “the Omniscient Being”、現代の邦語では「全知者」と言い得るものである。本研究は、仏教における「一切智」の思想の展開を跡づけ、その内容を分析したものである。特にインド思想史上においてブッダ (Buddha) が、「一切智」(sarvajña) すなわち、全知者であるか否かという問題をめぐって、それを肯定する仏教側の見解と、それに対して否定的であった仏教外のインド諸思想、とくにミーマンサー学派からの批判、およびこの問題に関連するジャイナ教徒の見解との対比を諸文献のうちに辿り、それによって「一切智」という概念の歴史的展開を跡づけようと試みている。

本書の著者はこれまで多年にわたってこの課題に取り組み、数多くの論稿を公表してきたが、このたびこれらの諸論稿をまとめ、新たな研究をくわえて、歴史的に一貫した叙述とした。そうして本書の著者は、インド仏教においてブッダは全知者とたたえられていたが、その意義内容は必ずしも一定していないという事実に着目して、宗教的崇敬を受ける最高の対象としての「全知者」の意義内容を確知しようとする。

本書は、序論および本論7章と結びより成り、巻末に第5章の資料である『中観心論』第9章・第10章和訳およびサンスクリット語・チベット語テキスト」を付している。

序論は、問題の所在と内外における従来の研究史を論じて本稿執筆の意義に及ぶ。

本論の第1章においては、インドのバラモン教、特に諸 Upanisad 聖典における用例の検討から出発して、「一切を知る者」とは、「究極の原理を知る者」の意味に解せられる場合の多いことを指摘し、さらに Yoga-sūtra におけるこの語の用例を諸注釈を参照しながら検討し、主宰神 (Īśvara) が全知であるのみならず全能であると考えるに至る思想の萌芽を指摘している。

次いで第2章においては、パーリ語文献に見られる一切智思想を詳細に検討し、初期仏教における一切智 (パーリ語で sabhāva) の思想を、主に南方上座部の伝えるパーリ語聖典を資料として論じ、ここでは一切智とはブッダが何時でも知ろうとすればすべてを知る力があるという意味と規定されていることを明らかにしている。

第3章においては、部派仏教のアビダルマ文献における一切智論を述べる。特に伝統的保守的仏教(いわゆる小乗仏教)の教義綱要書として有名な『俱舍論』の破我品第九に現れたその語を手がかりとして、未来を予知すること、十力など『俱舍論』の諸箇所に現れている説一切有部の見解を解明した。

次いで第4章においては、大乘仏教の教義注釈書として古来よく読まれる『大智度論』および『十住毘婆沙論』の所論を詳細に吟味している。両者はともに龍樹 (Nāgārjuna) の著として伝えられているが、『大智度論』は大品般若経に対する注釈書であるから、本書第4章の冒頭においては大乘経典の代表である『般若経』における一切智論を、主に『大智度論』の記述を遂って検討する。著者は、経の説く一切智、道種智、一切種智が究極においては般若波羅蜜(無分別智)を根底とする点で無差別であることを、同論は強調しているものと解している。次いで『十住毘婆沙

論』の「一切智人なるものを非難する」説を検討するに当たっては、著者は、この論典が五法藏説に言及することから、その犢子部の教義との結びつきをほめかしている。『十住毘婆沙論』・『大智度論』における「一切智人なるものを非難する」の説は、後代の論争を知るための手がかりとして重要である。

つづいて第5章「中観心論」に見られる「一切智説」は清弁 (Bhāvaviveka, ca. 490-570) の『中観心論』 (*Mādhyamaka-śrīdāya-kārikā*) およびそれに対するかれ自身の注釈 (*Tarkajvālā*) における一切智に関する論争の研究であるが、余人の追隨し難い著者の独壇場である。その第一は、唯識説を主張する瑜伽行派との間における、智が刹那滅か否かをめぐる論 (同論第五章)、第二はミーマンサー学派から向けられたブツダが一切智者であることに對する批判と、仏教側からの反批判 (同第九章)、第三は「一切智者たるものの成立を説示する章」と題する最終章 (第十章) の検討である。著者はこの最終章がジャイナ教批判であること、およびその論述が『大方等善巧方便經』に基づいていることを明らかにしている。

著者はサンスクリット語文献およびチベット語文献についての卓越せる読解力を利用して、ミーマンサー学派における一切智否定論者との論争、ならびにジャイナ教との論争を詳しく解明した。サンスクリット語およびチベット語の仏教文献を資料として利用して、部分的ではあるにもせよ、当時のミーマンサー学派およびジャイナ教の思想を解明したという研究は内外の学界を通じて初めての成果である。また清弁の述べている肉食に関する論議、草木に心が有るか無いかという論議を詳しく解明したことは、今後とも吟味さるべき大きな問題を含んでいる。

第6章は、同じ中観派のシャーントラクシタ (Santarakṣita 8世紀) の著した *Tattvasaṅgraha* (『真理綱要』)

の第26章「超感覺的対象を見る人の考察」を主材料とする研究である。

シャーンタラクシタのこのテキストを翻訳するのも、単にサンスクリットに精通しているだけでは不充分であり、ミーマンサー学の知識を必要とするのみならず、既刊のサンスクリット文のテキストをチベット訳本を参照して修正するという面倒な操作をなした。そのサンスクリット文のテキストについては既刊本のほかに、チベット訳文の利用し得るあらゆる板本、影印本、他の書における引用文、その引用文が基づいたと思われる原典（例えば *Maṅgala-sloka-vṛttika*）などを参照して、新しい edition を作成し、完璧を期している。掲載されたサンスクリット文のテキストは、全部校訂チベット訳文と対照して印刷してある。そうしてその校訂テキストに基づいて邦訳しているが、原典テキストの部分 (pp. 407-493) の注記は全部英文で書かれているから、国際性をもっていて、外国の学者もすぐに利用できる。この章もまたミーマンサー学派との論争を内容とするが、シャーンタラクシタはディグナーガ (Dignāga 陳那) にはじまる仏教論理学派の説を導入し、ヨーガ修行者の超越知という性格付けによって、ブッダを「正しい認識根拠」と認め、その一切智であることを論証しようと努めたと著者は見る。

著者がダルマキールティ (Dharmakīrti) など仏教の論理学者たちの論理学体系の有する宗教的倫理的意義を解明した部分 (本書第6章第1節) は、短いけれども重要な貢献である。

第7章では、真言密教における一切智に関連する諸問題を論じている。古来の密教諸家の理解がはなはだ複雑多岐にわたり、しかも著者は諸説を網羅的に列挙しているために筋を立てて理解するのが難しいが、主軸となる理解として、密教における一切智論を一行の『大日経疏』を主材料として、その解釈をめぐっては、日本の空海の説を手が

りとして、チベット仏教において重視されているブツグヒヤ (Buddhaguhya) などのそれと比較して論じている。密教における一切智智 (sarvajñāna) なるものは、『般若経』に説く「三智」(本書第4章に詳説) からの展開として「一切智智」の名で論じられているのだと解する。

著者は最後に「むすびとして」と題する論考において以上7章にわたる研究成果の主内容を各章ごとに個別的に概括し列挙して、併せて将来に残された諸々の研究課題を指摘している。ただしこの論考の部分はまだ理論的には充分に組織立てられておらず、体系的ではない。しかしそこに挙げられた諸結論はいずれも、学界にとっては新たな貢献である。

著者の論考分析は鋭いが、短い文章を以て全体の結論を述べてはいない。そのわけは全体にわたる結論を導き出すことは困難であったからであろう。その代わりに著者は、個々の思想家の所論について「すべてを知る」ということの内含する思想的意義を指摘している。かれらの所論はそれぞれ異なった context において意味をもっていた。

以上、諸章の研究を通じて、著者は「一切を知る人」についての論議に関する重要な資料を詳しく提示し、われわれに、その展開史の概要を知らせてくれた。従来の仏教思想史研究とは異なった新しい視点を提起している。ヒンドゥー教の哲学諸学派における同様の問題には詳しく言及することはできなかったが、これは今後の研究課題であろう。

著者はこの問題が人類の思想史にとって普遍的な問題であることを認めていた。むすびの一部分として「一切智」問題の比較思想的展望」において、アリストテレス、アレクサンドリアの哲学者たち、中世の哲学者たちも同

様の問題を論じていて、その影響は現代の論理学者にまで及んでいるという事実を指摘しているが、まだ理論的には検討さるべき多くの問題を残している。

なお、本書の最後に印刷刊行されている『中観心論』第9章・第10章和訳およびサンスクリット語・チベット語の諸テキストは、今後の研究者を益する資料的価値は大きい。そうして今後のインド仏教における哲学的論書を学問的に検討する場合の模範を示したものであると言えよう。

結論的な部分は今後さらに検討して改めて体系的論議に再構成する必要がある。しかし全体としては人類の思想史にとつて重要な観念を取り上げて、広い視野から、原典にもとづいて厳密な方法により検討したという点で独創的な研究であるといえる。学界に対する新しい寄与というべく、高い評価を受けるに値するものと認められる。